

《資料》

竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介

——和歌を主題とする組香(三)——

本稿は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介——和歌を主題とする組香(二)——(『社会科学』第46巻第3号、二〇一六年一月)、「同——同(二)——」(『社会科学』第46巻第4号、二〇一七年二月)に引き続き、竹幽文庫蔵『香道籬之菊』所載の組香について、とくに和歌を主題とする組香を対象に、翻刻と考察をおこなうものである。本稿では、楽の巻から、六歌仙香・慶賀香・新菊合香・志賀香・初恋香・當座香・四季歌合香の七つの組香を取り上げる。資料に関わる基本的な説明は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介(『社会科学』第46巻第2号、二〇一六年八月)を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、前掲『社会科学』第46巻第3号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、

矢野 環
福田 智子

「朱」と示し、一面の終わりには「」を付して丁数を記す。考察には、(1) 竹幽本組香の方法、(2) 和歌作品との関わり、というふたつの観点を設ける。

一、(1) の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」(『社会科学』第46巻第3号)を参照されたい。

一、(2) で引用する和歌作品の本文は、特に断らない限り『新編国歌大観』Ver.11(角川書店、二〇〇三年)に拠る。

一、巻末には影印を付す。

《樂卷一三〇》六歌仙香

【翻刻】

△（朱）六歌仙香

古今集の序に、貫之が書たる詞をかりて、組香に綴り侍る。

一 試なし。

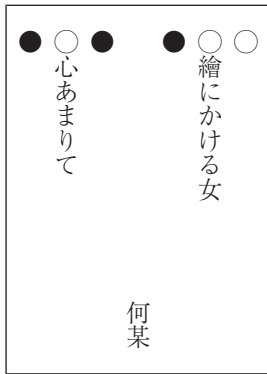
一 名乗紙にて聞くべし。

一 一の香、二の香、各三包含、都合六包打交て、三包含分けて結置て、前後と二次に一炷宛焚出す也。前」樂五五オ 三包含陰香とし、後三包含陽香と名付る。

一 前三包の内に、同香二炷有るを陰とし、一炷有を陽とす。後三包の内に、同香二炷有るを陽とし、一炷有を陰とす。前皆同香ならば、陰の同香とし、後皆同香ならば、陽の同香とすべし。

一 香六炷聞終りて後に、名乗紙に認め出し様、左のごとし。」

樂五五ウ



白圈は陰、黒圈は陽と心得べし。

○

○ 繪にかける女

○ 暁の雲にあへる月

● 女のなやめる

●

○

○

」樂五六オ

●

●

○

● あき人のよき衣

○ 心あまりて

● 花の陰の山人

○

●

●

○

●

○ うた

● ひじり

○

●

此圈の圖を以て記録に書く也。点は、何人間にても一点たるべし。認様左に記す。」樂五六ウ

六歌仙香記

〔表〕樂五七オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

一	3	6	1	前
			×	後
二	3	×	×	
	×	3	×	

*本香には、「一」「二」の香、各三包計六包を用いる。これら
を無作為に三包二組に分け、前段・後段として、一炷ずつ焚く。
*試香はない。

前段の三包を「陰香」と名付ける。すべて同香であれば、もちろ
ん「陰」であるが、同香二炷、別香一炷のときは、前者を
「陰」、後者を「陽」とする。また、後段の三包を「陽香」と名
付ける。すべて同香であれば「陽」であるが、同香二炷、別香
一炷のときは、前者を「陽」、後者を「陰」とする。

答えは、計六炷を聞き終わった後、名乗紙に記す。まず、前
段・後段それぞれに、同香か別香かを聞き分け、一炷ずつ「○」
（白圈・陰）、「●」（黒圈・陽）で答えを出す。三炷それぞれに
「陰」か「陽」かの判断をすると、答えは八種類ということにな
る。そこで次に、「○」「●」の組み合わせによって、「繪にかけ
る女」「暁の雲にあへる月」「女のなやめる」「あき人のよき衣」
「心あまりて」「花の陰の山人」「うた」「ひじり」という八つの
*聞きの名目のうちのいずれかを記す。

点は、何人聞き当てても一点とする。また、記録には、正答
を「○」「●」の組み合わせと聞きの名目で記す。

(2) 和歌作品との関わり

本組香冒頭に述べられているように、紀貫之『古今和歌集』
仮名序に拠る組香である。次に、該当箇所を部分的に引用して
示す（傍線部分参照）。

いにしへよりかくつたはるうちにもならの御時よりぞひろ
まりにけるかのおほむ世やうたの心をしろしめしたりけむ、
かのおほむ時におほきみつのくらあかきのもとの人まろな
むうたのひじりなりける、（中略）

そのほかにちかき世にその名きこえたる人は、すなはち僧
正遍昭はうたのさまはえたれどもまことすくなし、たとへ
ば糸にかけるをうなを見ていたづらに心をうごかすがごと
し、ありはらのなりひらはその心あまりてことばたらず、し
ばめる花のいろなくてにほひのこれるがごとし、ふんやの
やすひではことばはたくみにてそのさま身におはず、いは
ばあき人のよききぬきたらむがごとし、宇治山のそうきせ
んはことばかすかにしてはじめをはりたしかならず、いは
ば秋の月を見るにあかつきのくもにあへるがごとし、よめ

るうたおほきこえねばかれこれをかよはしてよくしらず、
をののこまちはいにしへのそとほりひめの流なり、あはれ
なるやうにてつよからず、いはばよきをうなのなやめる所
あるにいたり、つよからぬはをうなのうたなればなるべし、
おほとものくろぬしはそのさまいやし、いはばたきぎおへ
る山びとの花のかげにやすめるがごとし

すなわち、「うた」「ひじり」は歌聖、柿本人麻呂を指す。また、
六歌仙評から、僧正遍昭の「繪にかける女」「をうな」は若い
女性の意、僧喜撰の「暁の雲にあへる月」、小野小町の「女の
なやめる」、文屋康秀の「あき人のよき衣」、在原業平の「心あ
まりて」、大伴黒主の「花の陰の山人」が聞きの名目として採ら
れている。

《楽巻―三三》慶賀香

【翻刻】

△（朱）慶賀香

- 一 名乗紙にて聞くべし。
- 一 松竹靄龜の香、各二包充、蓬萊山の香一包^{也ウ香}、都合九包の
内、五包出香とし、皆終て包紙を開くべし。
- 一 地香、外に拵へ試に出す。蓬萊山の香は試なし。

一 地香八包打交て、其内四包除け、ウ香一包加交て、以上五
包聞香とす。」^{樂六一オ}

一 記録点は、地香独聞二点、二人より一点充、ウ香独聞四点、
二人より二点充也。聞香の出数によつて、記録の奥に詩哥
の内を書く。左のごとし。

○松竹の香の内、多く出たるは

嘉一辰令一^月 歛^レ無^レ極

萬一歳千秋 樂^ミ未^タ央^{ハナラ}」^{樂六一ウ}

○靄龜の香の内、多く出たるは

君か代は千代にや千代をさ、れ石の巖となりて苔のむす
まで

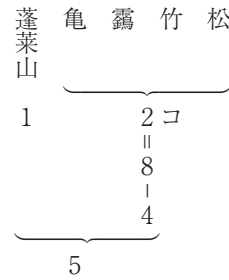
記録認様次に顕す。」^{樂六二オ}

慶賀香之記^{靄龜松竹}除（朱）

〔表〕」^{樂六二ウ}

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



*本香には、「松」「竹」「霧」「龜」の地香（試香あり）、各二包と、「蓬萊山」のウ香（試香なし）一包の計九包を用意し、地香八包のうち四包を除き、ウ香一包を加えて、計五包を用いる。答えは、すべて聞き終わった後、名乗紙に記す。

点は、地香の独り聞き二点、二人以上は一点、ウ香の独り聞き四点、二人以上は二点とする。

*香之記には、「松」「竹」の香が多く出た場合は指定された漢詩を、「霧」「龜」の香の場合は和歌を、記録の最後に記す。

(2) 和歌作品との関わり

香之記の最後に記す詩歌について、とくに出典は明記されないが、両者が近接して載るのは、『和漢朗詠集』である。

祝

嘉辰令月歛無極（かしんれいぐゑつくわんぶきよく）

万歳千秋楽未央（ばんぜいせんしゅうらくびやう）

謝偃（七七四）

長生殿裏春秋富（ちやうせいでんのうちにはしゅんしうとめり）

不老門前日月遲（ふらうもんのまへにはじつぐゑつおそし）

保胤（七七五）

わがきみはちよにやちよにさざれいしのいはとなりてこ

けのむすまで

（七七六）

よろづよとみかさのやまぞよばふなるあめのしたこそたの

しかるらし

（七七七）

右は、『和漢朗詠集』巻下、「祝」題の詩歌群である（引用は、『新編国歌大観』所収御物伝藤原行成筆本に拠る）。本組香において指示されているのは、七七四番の漢詩と七七六番の和歌と見られる。

ただし、和歌の方は、『古今集』巻第七賀歌の巻頭歌としても有名な一首であり、本来、初句は「わがきみは」であった（傍線部分）。一方、現代においては、日本国歌「君が代」によって、「君が代は」の本文で享受されており、本伝書においても、

初句は「君が代は」になっている。本伝書が成ったと考えられる宝暦七年（一七五七年。跋文に拠る）には、すでに、『和漢朗詠集註』（寛文十一年、一六七一年刊）、『和漢朗詠集諺解』（元禄六年、一六九三年刊）が刊行されており、初句はいずれも「君が代は」である。本伝書の成立時には、「君が代は」の本文が流布していたことが知られる。

《楽巻―三五》新菊合香

【翻刻】

△（朱）新菊合香

古今集

菅原朝臣

秋風の吹上にたてる白ぎくは花かあらぬか波のよするか
此哥によりて組香とする也。

一名乗紙にて聞くべし。

一 秋風の香三包、白菊の香三包^{ウ香}、都合六包打交」^{楽六四ウ}

て、其内二包除け、残四包出香とし、皆焚終て包紙を開くべし。

一 秋風香、外に拵へ試に出す。白菊香は試なし。

一 四炷聞終て名乗紙に書附出すべし。

一 記録は香元に哥を書く。秋風と白菊の所へ出香の順を朱にて認る。秋風一点、白菊二点也。各独聞の差別なし。香の

出様によつて名目を」^{楽六五オ} 認る。左のごとし。

秋風 三炷 白菊 一炷 波と書

秋風 一炷 白菊 三炷 花と書

秋風 二炷 白菊 二炷 菊と書

記録認様末に記す。」^{楽六五ウ}

新菊合香記 ^{白菊除}（朱）

〔表〕^{楽六六オ}

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

秋風	3	コ
白菊	3	
6 - 2 = 4		

本香には、^{*}地香「秋風」の香（^{*}試香あり）、^{*}ウ香「白菊」の香（^{*}試香なし）、各三包計六包のうち、二包を除き、残り四包を用いる。

答えは、すべて聞き終わった後、^{*}名乗紙に記す。

記録には、まず冒頭に古今集歌「秋風の」を記載し、「秋風」「白菊」の香が出た順を、「秋風」と「白菊」の文字の傍らに朱で記す。点は、聞き当てた人数に関わらず、地香一点、ウ香二点とする。また、「秋風」「白菊」の香が出た数によって、「秋

風「三炷」白菊「一炷ならば「波」、秋風「一炷」白菊「三炷」ならば「花」、秋風「白菊」二炷ずつならば「菊」の聞きの名目を記す。

(2) 和歌作品との関わり

本組香冒頭に挙げられている歌は、『古今集』巻第五秋歌下、二七二番である。

おなじ御時せられけるさくあはせに、すはまをつくり
て菊の花うゑたりけるにへたりけるうた、ふきあ
げのはまのかたにさくうゑたりけるによめる

すがはらの朝臣

秋風の吹きあげにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

「白菊」を試香のないウ香とし、また、記録に書く名目を「波」「花」「菊」とする趣向は、「白菊」を「花」か「波」かと見紛うという、この古今集歌の内容を生かしたものである。

《楽卷一三六》志賀香

【翻刻】

△(朱) 志賀香

新千載集

法印定為

匂ひくる風の便りをしほりにて花にこへ行く志賀の山道
此哥を以て組たる香也。

一 名乗紙にて聞くべし。

一 山の香、谷の香、川の香、各二包充、花の香一包」樂六六ウ
也ウ香、都合七包出香として、皆終て包紙を開くべし。

一 地香、外に拵へ香元に置くべし。本香七包焚終て後に試として三炷焚出す也。

一 本香焚出すと、無試十炷香の如く聞て、名乗紙に聞の次第を書附置べし。七包焚おはりて試香三包を聞て、假令は、試の山の香は、我聞香」樂六七オにては二に中り、又谷の香は三に中り、川の香は一に中る杯と思はゞ、左のことく名乗紙に認出すべし。

川山 谷

一二二三ウ三一

名乗

」樂六七ウ

一 記録は名乗紙の書付に合せて試香の中りを以て点をかくるべし。客香独聞四点、二人より二点充、地香独聞二点、二

人より一点充也。皆中には哥一首かく。皆無には迷と認る

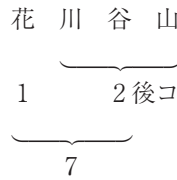
べし。記録認様猶又次に記す。」樂六八オ

志賀香之記

〔表〕樂六八ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



本香には、地香「山」「谷」「川」の香、各二包、ウ香「花」の香一包の、計七包を用いる。本香をすべて焚き終えた後に、地香三包の試香を行う。

本香は、無試十炷香の要領で聞き、四種類の香を聞いた順に「一」「二」「三」「ウ」とし、名乗紙に記しておく。七炷聞き終わったら、次に、試香三炷を聞き、「山」「谷」「川」の香が、先に記した「一」「二」「三」「ウ」のどの香に当たるかを判断し、初出の該当する香の右に、「山」「谷」「川」の文字を記入する。この名乗紙に記された答えをもとに、本香と試香との対応を聞き当てたか否かによって点を付ける。客香の独り聞きは四点、

二人以上は二点、地香の独り聞きは二点、二人以上は一点とする。すべて聞き当てた場合は、「匂ひくる」の歌一首を記し、また、すべて聞き違えた場合には「迷」と記す。

(2) 和歌作品との関わり

本組香冒頭に挙げられている歌は、『新千載集』巻第二春歌下、一三三番である。

文保百首歌たてまつりける時 法印定為

ち
にほひくる風のたよりをしをりにて花に越行くしがの山み

北白川から志賀の里へ出る山道は、「志賀の山越」といい、その山道において花を愛でる歌は、他にも、「袖の雪空ふくかぜもひとつにて花にはへる志賀の山ごえ」(風雅集・春下・二二四・前中納言定家・後京極摂政、左大将に侍りける時、家に六百番歌合し侍りけるに、志賀山越をよめる)、「風かをる木の下みちは過ぎやらで花にぞくらすがの山ごえ」(続拾遺集・春上・六八・前大納言良教・文永四年内裏詩歌合に、春日望山)などがある。

本組香は、「志賀の山越」にちなんだ「山」「谷」「川」の試香

を、本香の前ではなく、後段で行うところが比較的珍しい。「花」の香を追って、山道を手探りで辿っていくさまを表現したのか。

《楽巻―三七》初恋香

【翻刻】

△（朱）初恋香

新千載集

贈従三位為子

初逢恋といへる事を

下紐の又とけすはと思ふにそむすふもつらき契りなりける
試なし。

一名乗紙にて聞くべし。」樂六九オ

一 恋の香五包、客香五包別香箱、都合十包打交、其内二包除け、
残八包を二包充取て、二炷聞に焚出し、八炷皆終て包紙を
開くべし。

一 八炷皆聞終て、名乗紙に認様、

一番目 客恋は（朱） 下紐の

二番目 客恋は（朱） 又とけすはと

三番目 客恋は（朱） 思ふにそ」樂六九ウ

四番目 客恋は（朱） むすふもつらき

出香に不拘 恋客は（朱） 契りなりける

同 同香は（朱） 初恋

右の通を聞たる順に認出すなり。

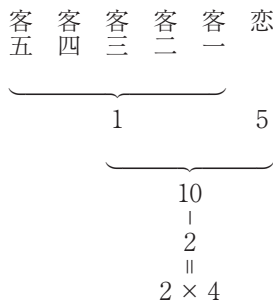
一 記録点は、恋の香独聞二点、二人より一点充、客香独聞三
点、二人より二点充也。記録認様左のごとし。」樂七〇オ

初恋香之記 恋恋除（朱）

〔表〕樂七〇ウ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法



* 本香には、「恋」の香五包と、客香を別香で五包の計十包から
二包を除き、残り八包を用いる。* 試香はない。二包ずつ取り、二
炷聞きにする。

答えは、名乗紙に記す。二炷聞きの香の出た順が「客」「恋」
の場合、一組目から四組目までのどこに出たかによって、順に
「下紐の」「又とけすはと」「思ふにそ」「むすふもつらき」とい

う歌句を、聞きの名目として答える。また、何組目に出たかに

関わらず、「恋」「客」の順であれば「契りなりける」、同香（すなわち「恋」「恋」では「初恋」と記す。

点は、「恋」の香の独り聞き二点、二人以上は一点、客香の独り聞き三点、二人以上は二点とする。「恋」の香に比し、五種類の別香から成る客香を聞き当てた際の得点が高い。

(2) 和歌作品との関わり

本組香冒頭に挙げられている歌は、『新千載集』巻第十三恋歌三、一三八六番である。

初逢恋といへることを

贈従三位為子

した紐の又とけずはと思ふにぞむすぶもつらき契なりける

二炷聞き八炷に対し、「恋」の香が初めてに出た場合は、何組目に出ても等しく「契りなりける」という聞きの名目で統一されているのは、本歌が、初めて契りを結んだ「初逢恋」の歌であることに依拠した趣向であろう。

また、二炷聞きの「同香」は、本組香の場合、「恋」と「恋」の組み合わせになるが、この時の聞きの名目を、恋の始発期の段階を表す「初恋」（はじめのこひ）とするのも、本歌の題から

の発想である。

なお、客香五包を別香にすることにより、「恋」の香を聞き当てるのがより困難となるが、これも、「初逢恋」の困難さを暗示してしよう。

《楽巻一四〇》當座香

【翻刻】

△（朱）當座香

一名乗紙にて聞べし。

一百人一首の内、哥一首の上五文字を取て、香五種の名として一包充にして出す。假令、我廬と名付るは左のことし。

一 和の香、哥の香、以の香、保の香、波の香、各一包充、都合五包出香とす五種各外に替へ試に出す。皆焚終て包紙を開くべし。」（樂七六才）

一 出香焚終て、各聞を名乗紙に書附、其下に折句に即興を詠て認出す。名乗紙認様左のことし。

和 哥 保 （朱） （朱） （朱）
わ か 宿 の か き ね の 梅 も ほ ころ び て

以 波 （朱） （朱）
い つ く の 里 も は る や き た ら ん

名乗

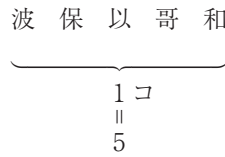
一 記録点は、何人にも一点充也。末のことし。」樂七六ウ

當座香之記

〔表〕樂七七オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



本組香で用いる本香＊の名称は、任意の『百人一首』歌の初句五文字に拠る。たとえば、「我がいはは宮このたつみしかぞすむよをうち山と人はいふなり」(百人一首・八・喜撰法師)であれば、「和(わ)」「哥(か)」「以(い)」「保(ほ)」「波(は)」の香＊(試香あり)、各二包計五包を用い、一炷＊ずつ焚く。

答えは、名乗紙＊に記す。香の名称を出香の順に書き、その下に、五・七・五・七・七の句頭に答えの五文字を置いた折句の歌を即興で詠んで書き入れる。五炷すべてを焚き終わってから包紙を開き答えを披露する。

点は、聞き当てた人数に関わらず一点ずつとする。香＊之記に

は、答えとして、香の名称とともに、詠まれた和歌も記入する。

(2) 和歌作品との関わり

『百人一首』に依拠した組香である。初句の五文字を五種類の香の名称とし、その五文字を出香の順に折句の歌として即興で詠まねばならず、和歌詠作の力量も試される。『百人一首』の享受のあり方としても興味深い。

ちなみに、本伝書中に、名乗紙の記入例として挙げられている「わか宿のかきねの梅もほころびていつくの里もはるやきたらん」という歌は、今のところ他には管見に入らない。

《楽巻―四六》四季歌合香

【翻刻】

△(朱) 四季歌合香

一 名乗紙にて聞くべし。

一 一二三ウの香、各三包充、都合十二包出香とす地香、外に拵へ試に出す。ウ香試をし。

一 一二三ウの香、各一包宛打交て、後炷と定め、除置く也。残

八包を同香二包充結合て四結とし、打交て二炷間に初に焚出す。包紙は十二包皆終て一同に開くべし。」樂八五オ

一 連座の人数に合て紙小札を拵へ、四季の文字を一字充認め、闌として出す。連中、是を取て、銘々四季の座を定めて、春

夏秋冬と順を立て並居るべし。

一 初八炷聞て名乗紙に認様は、

一一（朱） 春と書 二二（朱） 夏と書

三三（朱） 秋と書 ウウ（朱） 冬と書

後四炷は銘々持香斗を聞て、何番目と書附出す。」（樂八五ウ） 残

三炷は聞捨也。（春座^一の、夏座^二の、秋座^三の、冬座^ウの、是を持

の香といふ也。其番数は朱にて書べし。

一 記録、初八炷は何人間にても一点充、後四炷の香も一点充にて、哥を認る。左のことし。

（初持香中
後持香外） 上の句書

（初持香中
後持香外） 下の句書

初後共持香中 哥一首書」（樂八六オ）

四季の古歌

類題倭歌集の内

蓮空

春 咲ちるも程もなければ春の内をせめて花にてくらしはて

はや 定胤

夏 朝兒の光を色の時つ風空にめぐりて南にそ吹く」（樂八六ウ）

後土御門院

秋 わきて猶床も露けきときぬと老の寢覺ぞ驚かれぬる

教國

冬、秋の色はしらて過こし小篠原しのに花ちる雪の内かな

一 記録認様左に顕す。」（樂八七オ）

四季歌合香之記

〔表〕（樂八七ウ）

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

ウ	三	二	一	
		3 × 3	3	コ
3		3 × 4	1 × 4	後
	1	2 × 4	2 × 4	初

* 本香には、地香「一」「二」「三」の香（試香あり）と「ウ」の香（試香なし）、各三包計十二包を用いる。まず、「一」「二」「三」「ウ」の香から、それぞれ一包を取り、後段とする。一方、残り八包は、同香二包を組み合わせて四組にし、初段として二炷聞きで焚く。

参加人数に合わせて紙片を用意し、「春」「夏」「秋」「冬」の四季の四文字を一字ずつ記した圖を作り、これを引いて四季の「座」を決め、「春」「夏」「秋」「冬」の順に並んで座る。

答えは、名乗紙に記す。初段の八炷、二炷聞き同香四組について、「一」「二」「三」「ウ」の香の組に対し、順に「春」

「夏」「秋」「冬」に置き換えて答えを書く。また、後段は、定められた「座」の香（持香）のみを聞き、何炷目に出たかを朱で記す。残りの三炷は聞捨にする。「春座」「夏座」「秋座」「冬座」は、それぞれ「一」「二」「三」「ウ」の香に対応する。

点は、聞き当てた人数に関わらず一点ずつとするが、初段・後段で持香を聞き当てたか否かにより、「春」「夏」「秋」「冬」それぞれの持香に対応する四季の古歌を記入する。すなわち、持香を、初段で聞き当て、後段で聞き違った場合は下句を、また逆に、初段で聞き違い、後段で聞き当てた場合は下句を、初段・後段ともに聞き当てた場合は古歌一首を記載する。

(2) 和歌作品との関わり

本組香に見える「四季の古歌」は、「類題倭歌集の内」と明記されているように、『類題和歌集』巻三十雑之七、二八八二八（二八八三一）番の歌（日下幸男氏編『類題和歌集』〈研究叢書四一三〉、和泉書院、二〇一〇年二月。以下、本文の引用も本書に拠る。）である。

春

咲ちるもほともなければ春のうちをせめて花にてくらしは
てはや
蓮空（二八八二八）

夏

朝ひこの光をいろのときつ風空にめくりて南にそふく

定胤（二八八二九）

秋

わきて猶床も露けきときぬと老のね覚そ驚かれぬる

後土御門院（二八八三〇）

冬

秋の色はしらて過こし小篠原しのに花ちる雪のうちかな

教國（二八八三一）

和歌本文および作者名は、おおむね本伝書と一致するが、定胤の歌（二八八二九番）の初句は、「朝兒（あさがほ）の」（本伝書）と「朝ひこ（朝日子）の」（類題集）という本文異同が存する。「光」に続くことを考慮すると、「朝日」の意の「朝ひこの」が適切であろう。

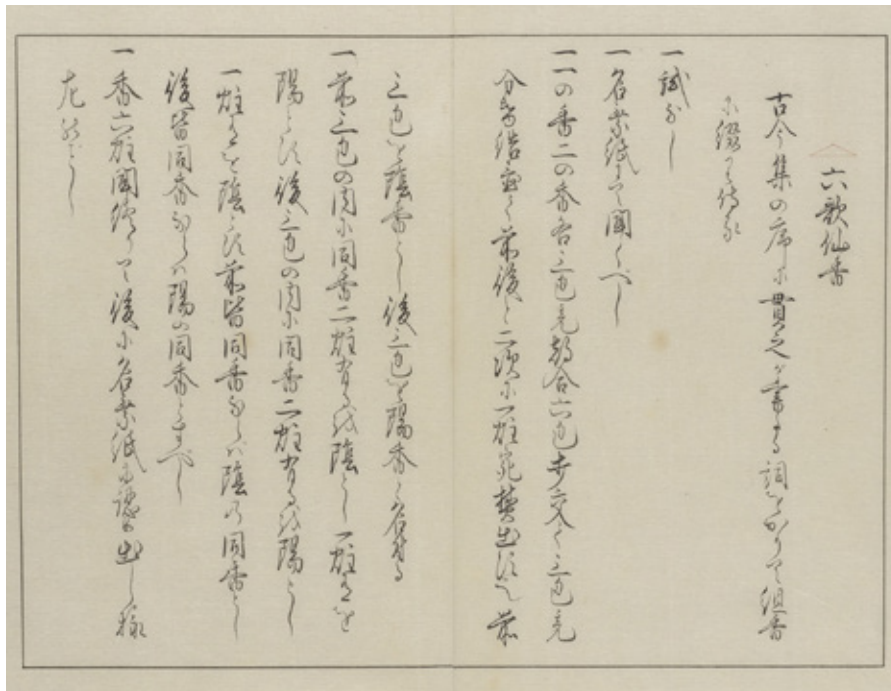
本組香は、「春」「夏」「秋」「冬」の一連の歌群に依拠して作られており、季節の「座」を設けて「持香」を定めるなど、四季の巡りを意識した構成になっている。

附記

本稿は、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究（同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、いずれも二〇一六―二〇一八年度）における研究の一部である。

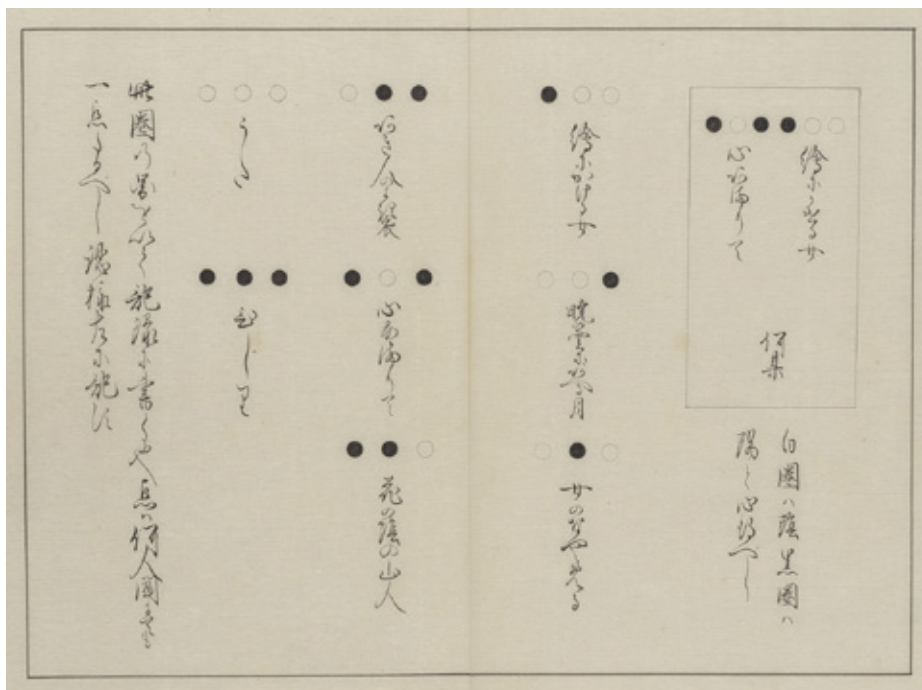
【影印】 綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。

(楽・五五丁表)



(楽・五五丁裏)

(楽・五六丁表)



(楽・五六丁裏)

[illegible]

(樂・五七丁表)

慶賀香

一名紙香（紙を焼く）

一松竹麝香の香（香二色）先蓮葉山の香（一色）又香（一色）

別合凡色の同色出香（皆紙香）

一檀香外（檀香）遠葉山の香（紙香）

一檀香八色歩交（其内四色）檀香の香（一色）又

以上五色調香（其内）

一龍珠（龍珠）檀香（二色）二人より一色先の香（檀香）

調四色二人より二色先の調香（檀香）

一川（川）龍珠（龍珠）檀香（二色）二人より一色先の香（檀香）

九色（九色）

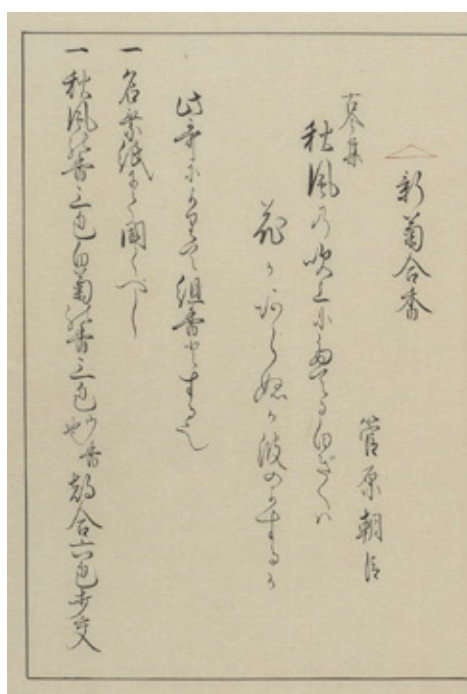
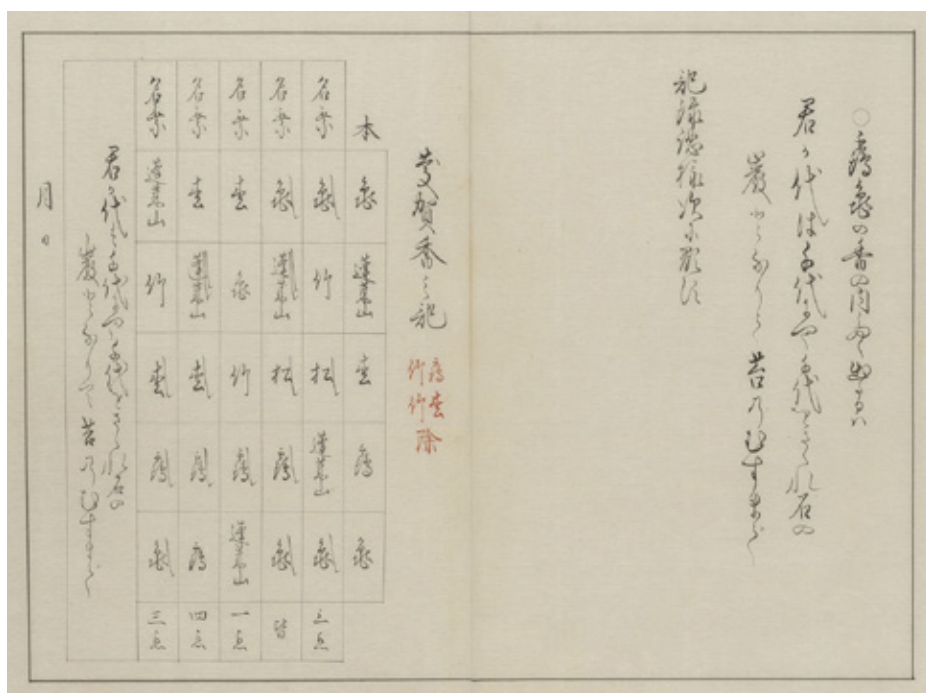
○松竹の香の内（其内）

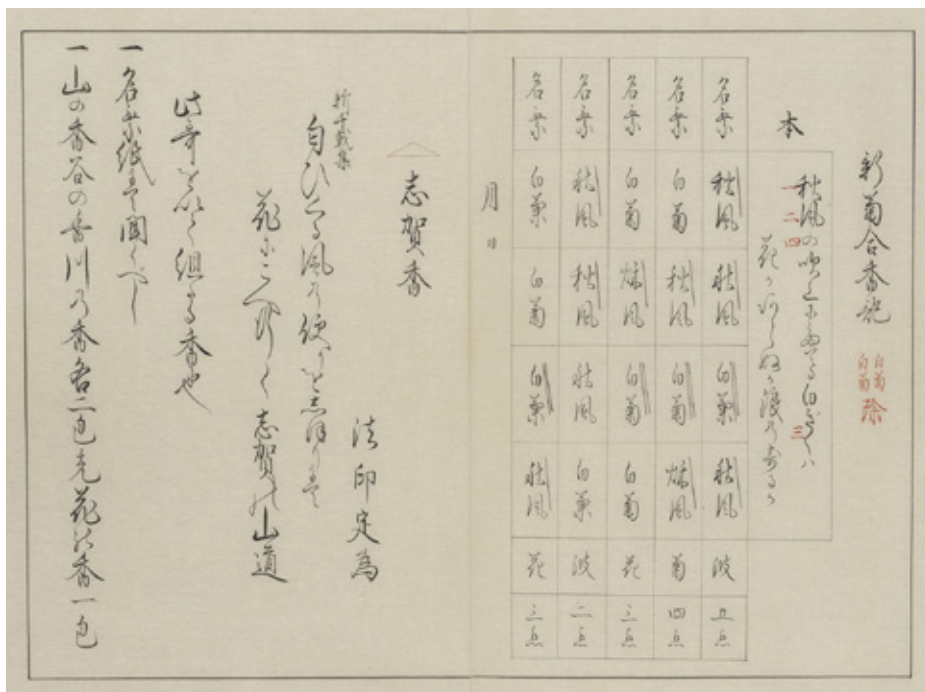
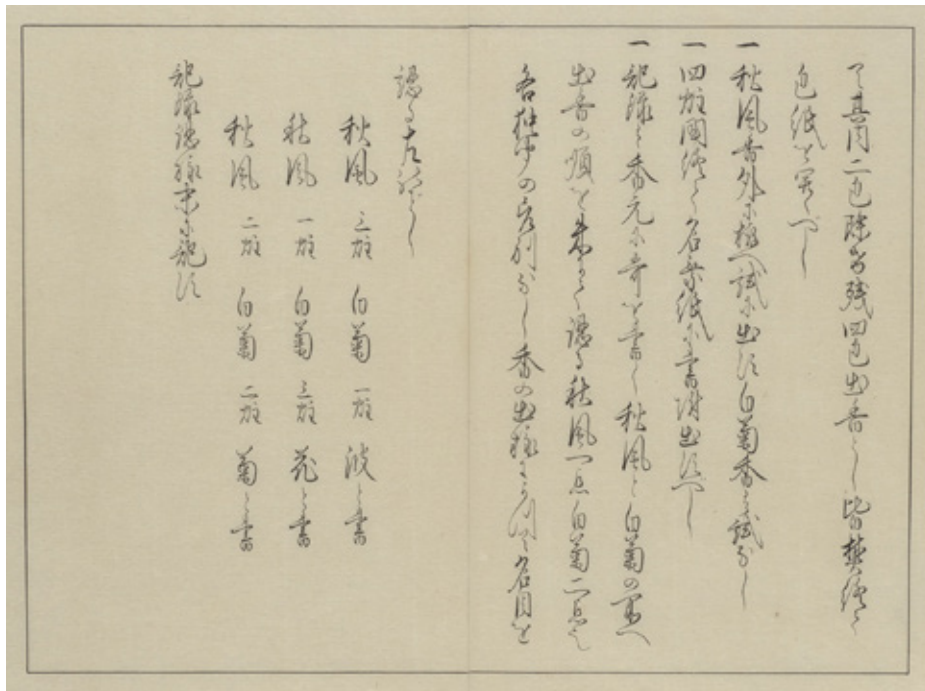
嘉辰令月歡無極

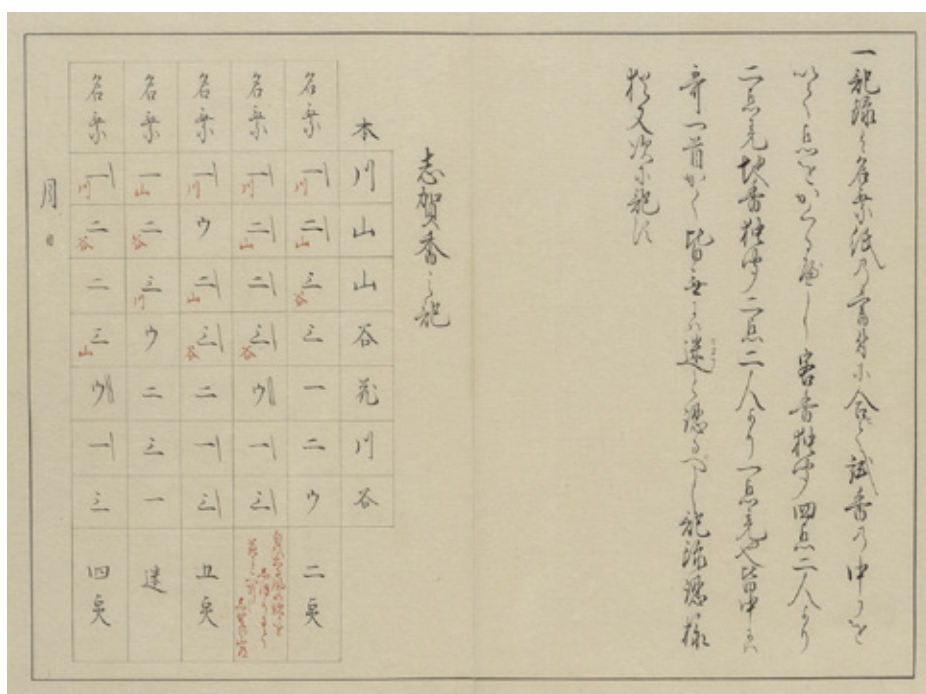
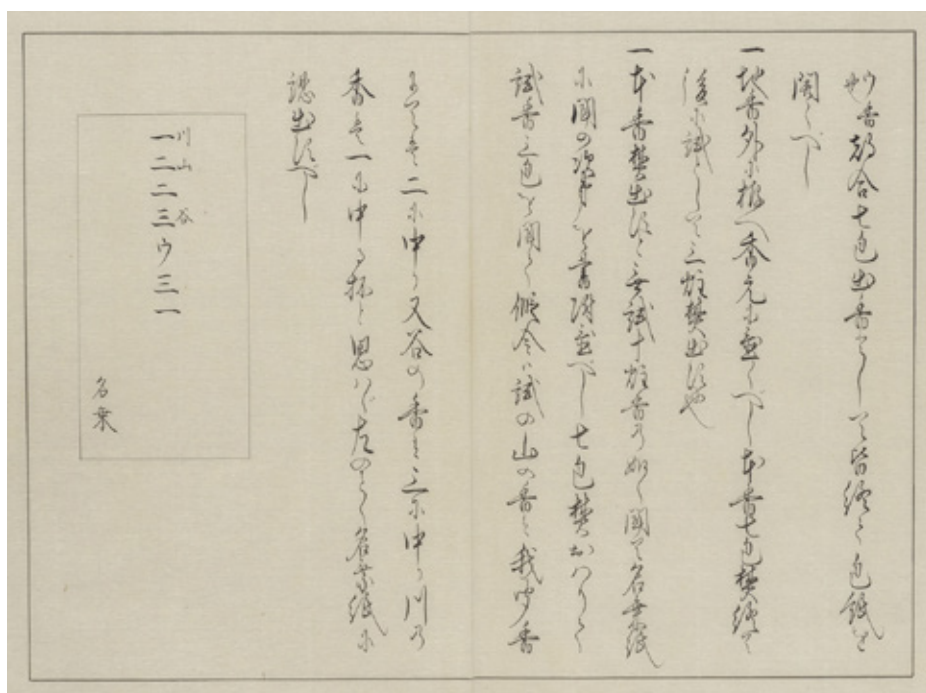
萬歲千秋樂未央

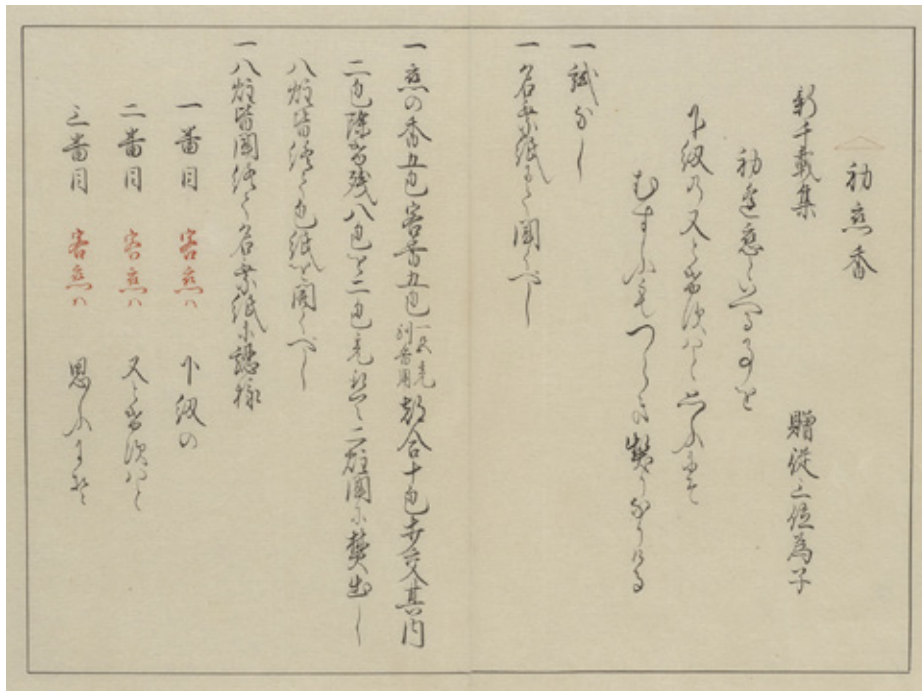
（樂・六一丁表）

(樂・六一丁裏)



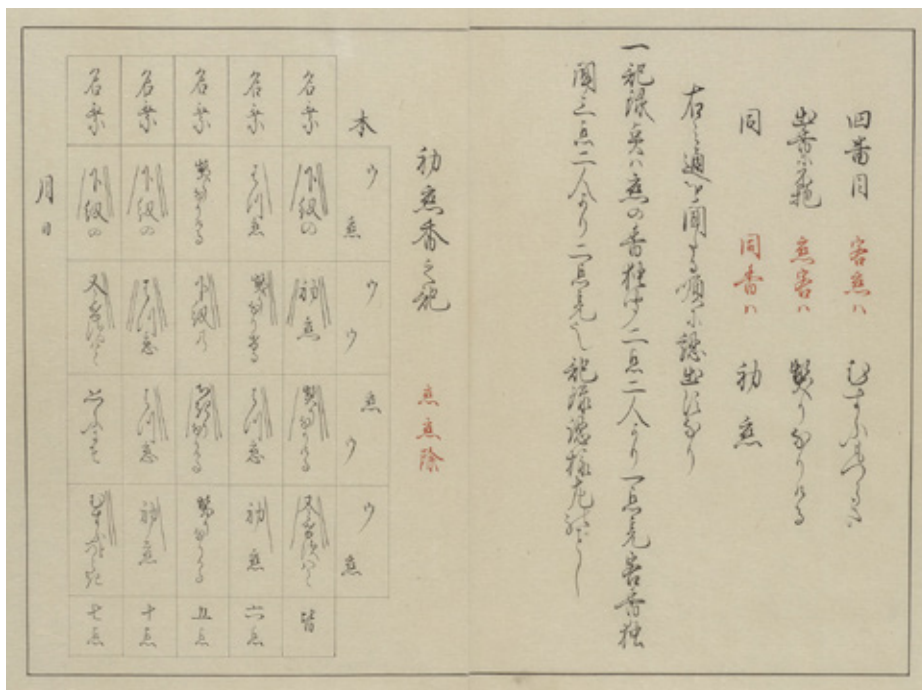






(楽・六九丁表)

(楽・六九丁裏)



(楽・七〇丁表)

(楽・七〇丁裏)

△四季款合香

一名紫絨（紫絨）と聞（紫絨）一

一二三ウの香名之色先於合十二色出香（地香即（紫絨）紫絨）

一二三ウの香名一色花を交へ後於合十二色臨多也

殘八色と同香二色先於合て四色を交へて二粒

聞し初八粒の八色絨ハ十二色皆然一同一聞

一連度の人教へ合を紙少れと稱へ四季の合を一言

先説の聞しと出り連中 是と云て詔へ四季の

度と定めては夏秋冬と順と立てて並居り

一初八粒聞し各半絨と詔へ

一一 春 言 二二 夏 言

三三 秋 言 ウウ 冬 言

後四粒と詔へ持香汁と聞し何苗月と詔へ

（樂・八五丁表）

（樂・八五丁裏）

殘之類と聞詔也各六粒の度二の秋度香

中度初。是と持の香より之甚苗散り各六粒

一龍珠初八粒と何人聞ても一色先後中散り香一色

先く奇と詔へたの

初持香中 上の白言

初持香外 下の白言

初持香中 奇一言言

初後持香中

四季の古歌

類題傳歌集之内

春

咲ちるも花もなほしと春の月と

せやくとくくくくくくくく

定胤

夏

朝風の光と色の照津風

くくくくくくくくくくくくく

蓮室

（樂・八六丁表）

（樂・八六丁裏）

了して折席を敷くは時ぬ
たのふゆえ井 勢子うれぬ

後土御門院

夫の痛覺并撃り此

教國

秋の池いふところこゝ小瀧原

志のふ花りも雪の内都

一記錄沈氏左子啟

四亭飲合香一記

[illegible]

（樂・八七丁裏）

